

ジョイスの時代のダブリン(5)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

17

(終了ページ / End Page)

28

(発行年 / Year)

2008-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004440>

ジョイスの時代のダブリン(5)

結 城 英 雄

宗 教

ブルーム一家と宗教

ブルームの父親は、ダブリンに移り住んで間もない1865年、ユダヤ教からプロテスタントに改宗した。信仰心からというよりも、社会に溶け込む都合による。ブルームは「ユダヤ人のキリスト教改宗促進ロンドン協会」の建物を見やりながら、「あの向うにある建物には昔おやじも通っていた」(8.1073)と独白している。後年、父親はこのことを後悔し、ユダヤ教への郷愁を抱くことになる。

こうした家庭背景の下、ブルームは誕生の折にはプロテスタントの洗礼を受け、長じてはプロテスタント系の高校を卒業する。だが、キリスト教は一家にとりやはり外来の宗教であったらしく、彼は信仰心を育むこともなく成長する。高校時代には科学思想にかぶれ、友達にキリスト教に対する懐疑さえ表明している。さらに、モリーとの結婚に際し、カトリックに改宗することにも抵抗はなかった。教会は彼にとり精巧な「組織」(5.424)に過ぎない。

一方、スティーヴンは、小学校から大学に至るまで一貫してイエズス会系の学校で教育を受け、カトリックの教えを徹底的に吹き込まれた。幼少のころには近くに住むプロテスタント教徒の娘のアイリーンと遊ぶことを禁じられ、性に目覚めて道を踏み外した思春期には強烈な罪意識に苛まされもした。「ぼくは二人の主人を持つ召使さ」(1.638)と語っているように、宗教を捨て文学を志す今も、ローマ・カトリック教会は、大英帝国と並び、その意識を支配する主人である。文学論を手始めに、彼の物の見方・考え方のほとんどが、キリスト教の教えに潤色されている。

ブルームとスティーヴンとでは宗教に対する考えがこのようにまったく異なる。むしろ、ブルームの立場が特殊なだけである。カトリック教はアイルランドの主流であり、知らない間に人々の精神を織りあげていた。フランスの彫刻家L.ルイ＝デュボワが驚嘆しているように、「アイルランドを訪れ、その地のカトリック信仰の激しさに、またその建造物に現われている熱情に驚かない人はありえない」。そうであるなら、宗教とは無縁と思えるブルーム一家も、その影響を免れえないであろう。事実、ブルームはユダヤ人として差別されている。また歌手である妻のモリーも、カトリック教徒から舞台をボイコットされた経験がある。宗教という観点からブルームの状況を考察したい。

宗 派

手始めに宗派を確認しておきたい。1901年当時、ダブリンの人口は290,638人で、このうちカトリック教徒が約81パーセント、英国国教会教徒が14パーセント、その他は長老派教会教徒、メソジスト派教徒、クウェイカー教徒、ユダヤ教徒などであった。アイルランド全体の人口は4,458,775人で、このうちカトリック教徒が74パーセント、英国国教会教徒が13パーセント、その他は長老派教会教徒、メソジスト派教徒、ユダヤ教徒などであった。ダブリンとアイルランド全体とを比較すると多少の相違が見られるが、これは北部のアルスターに長老派教会教徒、メソジスト派教徒、クウェイカー教徒といったスコットランドからの入植者が多いためである。南北問題はこの不均衡による。全体としてカトリック教徒が圧倒的多数を占めていたことは明らかである。

英国国教会はアイルランド教会とも言われ、1869年に到るまでイギリスの国教会であった。ダブリンの二つの大聖堂、聖パトリック教会とクライスト教会(15.1493)は、いずれも英国国教会に属している。はるか昔、カトリック教会から接収したものである。聖パトリック教会は5世紀に聖パトリックが改宗者への洗礼を施したと言われる場所に立ち、ジョナサン・スウィフトが「首席司祭」(3.113)を勤めた教会としても知られている。クライスト教会は、アイルランドの征服者であるアングロ・ノルマン人、リチャード・フィッツギルバートこと「ストロングボウ」(3.259)が眠っていることで有名である。総督を始め、醸造会社の経営者であるギネス兄弟、ビスケット会社の経営者ジェイコブなどの実業家、市裁判所判事のフォーキナーなどの司法関係者、W. B. イエイツ、レイディ・グレゴリー、ダグラス・ハイドといった主だった文学者なども英国国教会の教徒であった。

長老派教会としては、リフィ川の北、ラットランド広場に隣接してフィンドレーター教会(『若い芸術家の肖像』)が立っている。篤志家のアレクザンダー・フィンドレーターの寄付により、1864年に建設された。メソジスト派はイギリスのジョン・ウェズリー(1703-91)によって創始された。ユースタス通りに教会を持ち、ブルームの知人で銀行員のピュアフォイ一家(8.358)が属している。クウェイカー派はフレンド会とも称されるが、原義は設立者であるジョージ・フォックス(1424-91)の「主のことに震える」に基づく。市内にいくつかの教会を持ち、国立図書館館長のトマス・ウィリアム・リスターもクウェイカー教徒である。ユダヤ教徒はさらに少数であったが、それなりの地歩を築いていた。

ジョイスのテキストではカトリック以外の宗派への言及は少ないが、それでもアイルランドの政治や経済の実権をこれまで握ってきたのは、まさしく英国国教会教徒、長老派教会教徒、メソジスト派教徒などである。カトリック教徒は、これら少数のイングランド系やスコットランド系のプロテスタントに支配され、忍従の生活に甘んじてきた。特に17世紀末から始まるカトリック刑罰法により、カトリック教徒には様々な制限が課されてきた。この悪法はダニエル・オコネルの努力によって1829年に撤廃されたし、それ以前からも部分的な緩和が行なわれていたが、迫害の歴史は長く、人々の記憶からその悪夢が消えることはない。

こうした歴史の歪みを背景に宗教対立が育まれた。とりわけカトリック教徒は、英国国教会も長老派もメソジスト派も、さらにユダヤ教すらもプロテスタントに概括し、他宗派に猜疑の念を抱いていた。

『ダブリンの市民』では、薄汚れた子供の一隊が、2人の少年をプロテスタントと勘違いして、「スウォドラーやあい！ スウォドラーやあい！」とはやしたてている（「出会い」）。「スウォドラー」とはプロテスタントの意である。また『若い芸術家の肖像』では、カトリック信仰に懐疑を抱いたスティーヴンさえも、プロテスタントになる気はないかと友人に問われると、「自分に対する尊敬を失ったわけじゃない。論理的で整然としている不条理〔カトリック〕を捨てて、非論理的で乱雑な不条理〔プロテスタント〕に就いたって、そんなこと、解放になんかなるものか」と激昂している。宗教対立もアイルランド病の一つであるが、その背景にはカトリック教会のそれなりの勢力の拡大があった。

カトリック教会の拡大

事実、アイルランドのカトリック教会は、大飢饉以降、その勢力を飛躍的に拡大していた。スティーヴンの父サイモン・ディーダラスは、クリスマス之夜、「われわれは司祭にのさばられた不幸な国民ですよ」（『若い芸術家の肖像』）と憤慨しているが、1850年から1900年にかけて、飢饉や移民などで信者の数が500万人から340万人へと減少しているにもかかわらず、司祭、修道士、尼僧など聖職者の数は5千人から1万4千人へと増加していた。アイルランドはカトリック教徒千人に対する聖職者数でヨーロッパ随一となっており、しかもこの数には海外へ旅立つ宣教師の数は含まれていなかった。裕福な家庭の子弟の遺産を受け継いだり、信者からの寄付金を得たりして、教会、学校、神学校、修道院、病院などが増設されたためである。

そして教会は勢力を拡大しただけではなく、同時に政治の舞台にも登場するようになってきた。サイモンが憤慨するのはその問題である。実際、ダブリンの大司教であるポール・カレン（1803-78）は、フィンニア会の武力行使を非難し、その闘士の一人、T. B. マクナマスを故国で埋葬することに反対した。さらに1890年12月、ダブリンの大司教ウィリアム・ジョーゼフ・ウォルシュ（1841-1921）は、国民党党首であるパーネルの不義を断罪し、彼を失脚させることになった。教会は聖職者の数を増やしただけでなく、民衆を指導する一大勢力にもなっていたのである。アイルランドの「自治」（Home rule）は「ローマ支配」（Rome rule）とまで言われた。

宗教と政治との結びつきはメイヌース神学校から始まる。ここは英国政府が設立した神学校で、フランス革命の動乱を逃れてやってきたフランスの司祭や教師を中心に始まった。英国政府は援助を与えてカトリック教会を懐柔するつもりであったし、メイヌース出身の司祭たちも、「ガリカニズム」（ローマ聖庁よりも一国の特権強化）の立場からいかなる場合においても英国政府に忠誠を誓うことになっていた。だが皮肉にも、学生のほとんどが小作農の家庭の出身で、次第に民族主義運動と関わりを持つようになった。彼らは両親の犠牲の下に教育を受け、農民の考えを共有し、民族主義を支持していったのである。カトリックの勢力の拡大は教育の支配となり、国民の意識を構造化することになった。

ちなみに、1825年当時、聖職を志している学生は、メイヌース神学校で390人、管区の神学校で120人、大陸の機関で学ぶ140人であった。そして1853年当時、アイルランドの2,291人の聖職者のうちメイヌース神学校出身者は1,222人で、そのうち大司教は4名中2名、司教は25名中21人を占めていた。カトリ

ック解放令のために奮闘するダニエル・オコネルを支援したのは、メイヌース神学校出身のジョン・マクヘイル (1791-1881) である。プロテスタントのダブリン大主教 R. ホウエイトリ (1787-1863) は、1852年、「ヨーロッパのうちでも最も政府に不満を抱いている最も反英的な施設」ができたと嘆いている。

マクヘイルに続き、ポール・カレンも積極的に「ウルトラモンタニズム」(教皇権強化主義) をかこち、教会の中央集権化を推進し、教会の力を飛躍的に高めた。メイヌース神学校と無縁であったことも幸いした。彼はローマのアイルランド・コレッジの校長、アーマー大司教を経た後、1852年からダブリン大司教になった人物である。1866年にはアイルランド初の枢機卿に任命された。そしてカトリック教徒のために中等教育を促進し、ユニヴァーシティ・コレッジの前身のカトリック・コレッジの設立に尽力した。また英国国教会の国教会制度の廃止に努め、教会の建築にも力を注いだ。教皇不可謬説を支持し、アイルランド社会を結束させるのにも貢献した。

その後、教会の運営や外交においてさらに指導力を発揮したのが、まさしくウィリアム・ジョーゼフ・ウォルシュである。彼はメイヌース神学校出身の民族主義者で、1885年から1921年までダブリンの大司教の座に留まり、アイルランドの政治にも大きく関わった。パーネルの不義密通を断罪しただけではなく、フィリーマンズ・ジャーナル社への「投書」(7:181) に示唆されているように、彼はいたるところで積極的に論戦を挑んでいたのである。

しかし、カトリック教会と民族主義運動の関係は曖昧である。それは1903年のアイルランド訪問の際、エドワード七世がメイヌース神学校で歓迎されている (12.1402) ことにも明らかである。1871年にいたるまで、この神学校がイギリスの経済援助によって運営されていたという経緯もあるが、政治権力との盟約を取り結び、国民よりもむしろ自らの組織の安泰を計ろうとしていたためである。

マルクスが宗教は来世という現実生活の補償の装置を考案したと指摘するとき、彼の批判の矛先は、国家の支配者と共謀し現実の矛盾を容認する教会という制度に向けられていた。ブルームの言葉を使うなら、教会は自らが「国の脂を食って生きている」(8.34) ことに思っていたことはない。いわんや、啓蒙思想という美名によって、国家と同じく、教会も非西洋諸国を支配しようとする自らの営為に気づくこともなかった。同じくブルームは、アフリカや中国への伝道をめぐり、「彼らにとってはけがらわしい異端邪説だ」(5.327) と非難している。

カトリック教会の組織

カトリック教会の力はその緻密な組織力に基づいている。アイルランドにおいては、大きくアーマー、ダブリン、キャシエル、トゥアムの四つの大司教区に分かれ、各大司教区はさらにいくつかの司教区に分かれ、また各司教区はいくつかの教区へと分かれていた。たとえば、ダブリンの場合には、W. J. ウォルシュ大司教の下、ダブリン、ファーンズ、キルデア・アンド・レイリン、オソリーの4つの司教区に分かれ、ダブリン司教区は市内と市外合わせて70の教区に分かれていた。

こうした階層秩序は「教階制度」と呼ばれる。幼き日、ステイーヴンは罪の問題をめぐりこうつぶやいている。「司祭は何が罪か知っているしそれを犯さないだろう。が間違っふと犯してしまったら告解

に行くのにどうするのだろう。たぶん副校長のところへ告解に行くのだろう。もし副校長が犯したら校長のところへ行くのだろう。校長は管区長のところへ、管区長はイエズス会の総会長のところへ。それが修道会の秩序というものだ」(『若い芸術家の肖像』)。

カトリック教会もいくつかの宗派に分かれていた。独自の教会や修道院を組織し、独自の運営方針を持っていた。しかし、基本的な考えは同じであった。そして人々に修養の場を提供するだけでなく、病院や教育といった慈善事業を通して社会に関わってもいた。ブルームが集金に出かけたカルメル会のトランキア修道院(8.143)、あるいはアル中を矯正するためにフレディ・マリンズが訪れようとするトラピスト修道院(「死者たち」)などもそうした組織である。またスティーヴンは罪の告解のために、自ら所属するイエズス会の教会ではなく、フランシスコ修道会経営のカプチン会教会を訪れる。罪意識を少しでも遠ざけようとしたためではなかろうか。

いずれにせよ、一般の人々の実際の交流の場は教区の教会である。ジョイスの作品で有名な教会を列挙してみよう。上ガーディナー通りには聖フランシスコ・ザビエル教会があり、スティーヴンのクロンゴーズ・ウッド・コレッジ時代の校長、コンミー神父が隣接の修道院の院長をしている(10.1)。『ダブリンの市民』所収の「出会い」のディロン家、「恩寵」のカニンガム家などの所属する教会でもある。またマルバラ通りの仮大聖堂は、「下宿屋」のムーニー家や「母親」のカーニー家の教会であり、ダブリンの中心的な存在でもある。そしてマーチャンツ河岸のアダム・アンド・イヴ教会は、ジューリアが第一ソプラノとして働き(「死者たち」)、ボブ・ドーランがミサ・ボーイを務め、『フィネガンズ・ウェイク』の冒頭で言及される教会である。さらにサンディマウントの海の星教会は、トム・カーナンが結婚式を挙げ、ディグナムやガーティの一家の所属の教会でもある。

その他、ブルームが休憩したウェストランド通りのオール・ハローズ(聖アンドレ)教会、メアリ・ジェインがオルガン奏者をつとめるハディントン道路の聖マリア教会(「死者たち」)、スティーヴンとブルームが洗礼を受けたラスガー道路の三守護聖人教会(17.546)などがある。教会は「マルバラ通り」(「下宿屋」)というように、通りで名指すこともあった。またカトリック教会と英国国教会はそれぞれ「チャペル」と「チャーチ」と区別して呼ばれていた。

教会の運営は「子産みと人の終わりの奉納金」(14.258)、いわゆる洗礼と葬式の際の徴収の他、遺贈、篤志家の寄付、コンサート、教会の入口での集金、バザー、パンフレットの販売、秘密袋などによった。ミサの後などにも信者に献金を求めることがある。たとえば、オール・ハローズ教会でブルームは、「抜け出したほうがいい……たぶん盆を持って廻って来る」(5.450)と独白している。

教会は人々の生活と密接な関わりを持ち、日常生活のあらゆる面で人々の行動を組織している。まず誕生から死亡に至るまでの儀式がある。洗礼は誕生と同時に改宗の場合にも行なわれている。結婚も教会で挙げるのが普通で、トム・カーナンは海の星教会で(「恩寵」)、ブルームは三守護聖人教会で挙式した。そして死亡も教会が司り、司祭は死の床にある人に終油の秘蹟を施し、告解を聴く任を司る。フリン神父は同僚の司祭にそうした世話を受けたらしい(「姉妹」)。また教会には色々と祝日がある。そのうちで最大なのはイースターとクリスマスであるが、肉食禁止の日もあり、スティーヴンは四旬節の水曜

日にクロンゴーズ・ウッド・コレッジで「魚のフライ」(『若い芸術家の肖像』)を食べている。そして日々、祭壇から、また告解室で、人々に行動の助言を与えている。スティーヴンは教会を離れた今も、ミサ聖祭、十字架への道行きといった考えを拠り所に文学観を構築している。

宗教教育

教会の役割の中でも重要なものの一つは教育で、学校教育も宗教と不可分であった。クロンゴーズ・ウッド・コレッジでは朝夕、礼拝堂での祈りが義務づけられていた。またベルヴェディア・コレッジでも、昼にロザリオの祈りが課されていた。こうした日常生活は、カトリック教会の運営する学校ではごく普通のことである。教材として使用されていたのは、『メイスース教義問答』や『ドハーブ教義問答』で、それを基礎に「司教のテスト」と呼ばれる試験も課された。スティーヴンもクロンゴーズやベルヴェディアで、その教えをたたき込まれたらしい。また人妻との関係に心を乱されている銀行員、ミスタ・ダッフィも同様の学校で学んだらしく、書棚には『メイスース教義問答』が置かれている。そこには姦淫の項目が記されている(「痛ましい事件」)。自由思想を標榜しながら、人妻と一線を越えられないのは、その書の教えによる。

学校では時期に応じた宗教行事もあった。その一つは「静修」と呼ばれる勤行で、集中的に宗教心を鍛える期間であった。マンガンの姉(「アラビー」)やスティーヴン(『若い芸術家の肖像』)は、それぞれの通う修道院やベルヴェディア・コレッジで静修を経験している。あるいは「信心会」という組織があり、互助的役割をしている。ベルヴェディア・コレッジには聖処女マリア信心会と聖天使信心会があり、スティーヴンは前者の監督生を務めている。ガーティも「マリア信心会のバッジ」(13.639)を所持している。

そして宗教教育のうちでも最も力あるのが告解の役割で、このシステムにより、教会は個人の秘匿する隠微な領域に対しても支配権を握っていたことになる。モリーは微に入り細にわたって告白を迫られた経験を回想し、「彼がわたしにさわりました神父様……いやいやあなたの体のどのへんにですかわが子よそれはあなたの脚のうしろがわの上のほうですかyesずっと上のほうです坐るへんですかyesまいやださっさとおしりって言えばいいじゃない」(18.109)と語っている。告解は精神分析にも等しい。精神分析が患者の神経を鎮めるように、告解は信者から地獄の恐怖を取り除くことを目的とする。両者に共通するのは逸脱、とりわけ性の逸脱からの軌道修正である。ミシェル・フーコーによると、監獄におけるパノプティコン(一望監視施設)と囚人との関係は、まさしく司祭と信者の関係に置き換えられるという。パノプティコンが教会の告解室へと変わっただけであり、そこには厳然とした権力装置がある。牧人が羊の群れを見張るように、司祭は一人ひとりの信者を監視する。

慈 善

慈善事業も教会の大切な仕事であった。聖ヴァンサン・ド・ポール協会のような慈善全般を扱う組織から、孤児や寡婦など個別の貧困を扱う組織まで様々であった。物質的援助を中心とし、たとえば、ス

ティーヴンの妹のマギー・ディーダラスは上ガーディナー通りの慈悲童貞会修道院で「エンドウ豆のスープ」(10.278)の施しを受け、コンミー神父はディグナムの遺児の一人をラ・サール会経営の「アーティン授産学校」(10.3)に世話しようとしている。

慈善活動には問題点もなくはなかった。まず、教区単位の活動であったため、聖マリア仮大聖堂、聖ケヴィン、聖マイカンといった貧困教区での活動には制限があった。また中流階級への援助に力を注ぎ、下層の極貧の家庭への支援を怠った。さらに、慈善が改宗活動と結びついていて、本来の活動からずれていた。教会は社会の根本問題に取り組んでいなかったとの意見もある。

売春の問題を取り上げては明らかである。ヨーロッパの三大売春地帯の一つである「モント」は、ダブリンの大司教の管轄下のマルバラ通りの仮大聖堂とは目と鼻の距離にある。だが、教会は娼婦の更正施設の「マグダラの家」(15.402)を設立しているだけで、売春の問題には取り組んでいない。「仮」大聖堂(Pro-cathedral)は「娼婦」(prostitute)の大聖堂とも言われる。M. J. F. マッカーシーは、モントを日本の吉原になぞらえながら、「私自身も、5年間、マラバラ通りの大聖堂のミサに出席しました……が、正直なところ、説教壇から売春を諷める言葉を聞いたことはありません」と非難している。

布教活動

布教活動は教会で何より重要な仕事である。プロテスタントへの改宗はカトリック刑罰法の下で制度的に推進されていたが、プロテスタント教会はまた日常生活でも食物で誘惑していた。ブルームはドーソン通りの本屋を覗き込みながら、プロテスタントの改宗組織である「鳥たちの巣協会」について、「じゃがいも飢饉の当時に彼女らは貧民の子供たちにスープを配ってプロテスタントに改宗させようとしたそうだ」(8.1071)と独白している。彼の父親がプロテスタントに改宗した系列組織、「キリスト教改宗促進ロンドン協会」の建物はその先にある。

カトリック教会も同様であった。あるいは、プロテスタント教会や他宗派の布教活動に安穩としていられなくなったのであろう。過去の迫害の歴史も記憶に生々しく、国外のみならず、国内でも活発な布教活動を展開した。そしてプロテスタントの要塞であるイギリスの出版物に対抗するかのようになり、カトリック教会は『アイルランドの聖心の使い』、『アイルランドのカトリック』、『アイルランドのロザリオ』といった雑誌や新聞も発行した。同時に教区の結束を強化する方法を工夫し、またアイルランドの移民問題にも関心を向けていた。

こうして宗派間に大きな溝ができていた。結婚も同宗派に限られ、ブルームも結婚のためにプロテスタントからカトリックに改宗している。カトリック教会は異教徒との結婚を認めていなかったのである。また宗派の問題は人間関係にも影響を与えた。カトリックと他宗派との関係は水と油とも言われていた。ブルームは自殺のことが話題にされた折、父親のことで負い目もあり、「ここは自殺にきびしい」(5.346)と独白する。「ここ」とはアイルランドのことである。アイルランドはブルームの生国でありながら、彼の意識内においてははまだ「ここ」にすぎない。そもそも彼はカトリックに改宗しているにもかかわらず、生来カトリック教徒であった知人たちの輪に入りこめていない。

修道女の役割

ところで、教会の活動で見落とされているのが修道女の役割である。女子修道院の数は 1800 年には 11、1845 年の飢饉発生直後に 91、1900 年には 368 と飛躍的に増加し、修道女の数もこの百年の間に実に 120 人から 8 千人へと増加している。彼女たちは宗教に献身すると同時に、教育者として、病院や貧救院の看護婦として、またその他の慈善活動家として社会に貢献していた。その数から推測しても、彼女たちがアイルランド社会で果たした役割には少なからぬものがある。

19 世紀の女子修道院は、社会から隔離し観想的な生活を送っていた中世の修道院とは異なり、積極的に世の中に奉仕することを志向していた。奉献修道女会、アイルランド愛徳修道女会、ロレット修道女会、慈悲修道女会、聖なる信仰修道女会などとともに、大陸からアイルランドにやって来た修道女会も数多くあった。いずれも中流の上層・中層の女性が仲間を募り、貧しい人々のために働くことを目的に設立した組織である。プロテスタントとの抗争に促され、中流階級のカトリックも、貧しい同胞を救済しようという使命感を強めたのであろう。

にもかかわらず、女子修道院は男性の教階制度の支配下にあり、相互の関係を分断され、自由な行動が制限されていた。修道院を運営するには財政援助を受け、地域の男性聖職者たちの理解を得ることが必要であった。そのことは女子修道院の分布図にも明らかで、C. クレアの指摘するように、そのほとんどがカトリックの多い地域、特にゴールウェイとダブリンを結ぶ線の南部、教会のある都市部に集中している。教階制度は修道女の活躍を賛美しつつも、ヴィクトリア朝の女性の理想像のイデオロギーに倣い、彼女たちが「発言」することを禁じていた。そもそも、女子修道院の内部にも格差はあり、教階制度を受け入れる保守性を備えていた。女子修道院に入る段階で、持参金の有無により「聖歌隊修道女」と「平修女」に分かれ、またその後の働きにより「シスター」から「マザー」への昇格があった。

修道女のこうした受動的な役割は、彼女たちの女子教育にも反映していた。女子修道院の経営する多くの学校の授業内容は、音楽、裁縫、フランス語などに限られていたのである。女子の役割は家庭にあり、女性的であることが強調されていた。ダブリンの大司教、ポール・カレンの言葉を使うなら、女子の教育の目的は、「賢くなり、夫を愛し、子供を愛する」ようになるようにすることである。こうした教育方針は、1880 年代、宗派別の教育訓練所が設立されるに及びより強まった。修道女たちの女子教育は自らの立場の反映でもあるだろう。

ブルームはドミニコ会修道院の近くに住み、またヒーリー文房具店の外交員としていくつもの女子修道院へ出かけながら、トランキアラ修道院を想起するだけである。それはこうした彼女たちの受動的な役割によるものであろう。さらに彼は、修道女と処女を結びつけ、「トランキアラ修道院には石油の匂いを嗅ぎたがる女がいるとあの修道女は言っていた。処女のままでいるとしまいには気が狂うだろう」(13.780) と偏見を抱いている。M. ラディと C. マーフィによると、修道女は娼婦、女中、女の乞食などと同じく「他者」という扱いを受けているという。

教会の麻痺

しかし、カトリック教会も権力を増強するにつれ、自らの問題点を顕にすることになった。それは教会そのものの存在と関連してる。教会は貧しい人々の慈悲に依存しながら、人々に生きる指針を与えるどころか、逆に人々の生きる意志を抑圧していたのである。「(アイルランドにおける) 精神病の増加の真の原因はローマ・カトリック教信仰である」と指摘する人もいた。同じくジョイスも、「アイルランドに広がる経済的・知的状況は個性の発達を認めず……個人の自発性は教会の影響と勧告で麻痺させられている」と主張している。

教会の麻痺の本質については、たとえば、マイケル・ダヴィッドが興味深い例を取り上げている。大飢饉の蔓延する1847年のこと、「大飢饉が恐ろしい速さで広がり、何十もの人々が飢えと熱病で亡くなっている。しかし小作人たちは勇敢にも小作料を払い続けている」との私信を西コークのある司教から受け取ったオコネルの長男、ジョン・オコネル議員は、「地主から小作料をだますよりは飢えで死ぬ方を選ぶ国民とともに生きられることを神に感謝する」と述べたという。ダヴィッドは、ジョン・オコネルばかりか、彼を追い立てることもなかった聴衆を含め、国民の感覚の麻痺を「誤らされた道徳」と非難している。

カトリック教会もこうした非難を知ってか、指導者としての役割を果たそうとするかのように、カトリック教国としてのアイルランド人のアイデンティティを、好戦的に説き始めた。彼らは都市＝悪徳、農村＝美德という単純な思考様式に拠って立ち、英国や英語が前者、アイルランドやゲール語が後者と捉えた。こうした思考様式は彼らの多くが農村出身者であることに基づくが、同時にプロテスタント国の英国やその言語である英語をスケイプゴートとすることで、民族主義者を招集しながら自らの責任を転嫁することにも役立っていた。

教会のこうした交戦的な姿勢は、自らの弱さの糊塗でしかない。様々な方面でその自己防衛が露にされた。禁酒もその一つで、滑稽にも、酒により人々の道徳的性格が蝕まれると考えられ、禁酒運動が展開された。英国の文学への嫌悪も主張され、英語で書かれたものは病めるものと否定された。カトリック人口の減少を憂えるあまり、移民への反対も唱えられた。さらに女性たちの参政権の要求をめぐり、英国の悪しき影響と退けた。そしてユダヤ人やフリーメイソンへの排斥も、同様の立場から生み出されていた。ブルームに対する市民の差別もこうしたコンテクストによる。

ユダヤ人としてのブルーム

実際、デージー校長は、アイルランドはユダヤ人を入国させたことがないからユダヤ人を迫害したことがない(2.442)、とステイーヴンに語っている。彼の発言が誤りであることは、ブルームを初めとする何人かのユダヤ人の存在により明らかである。彼は一種の逆説を銜っているのである。彼は偏狭なカトリックの反ユダヤ主義を皮肉っているのである。

ダブリンにおけるユダヤ人の歴史は古い。早くも1650年にユダヤ教会堂がクレイン小路にできた。その後は1745年にマルバラ・グリーンに移り、さらに1835年にはマリア修道院通りの聖マリア修道院跡に

越し、そして1892年に「アデレイド道路」(10.413)に新しくユダヤ教会堂が建設されている。ユダヤ人居住区は、ステイーヴンの友人のデイヴィンの住む「グランタム通り」(『若い芸術家の肖像』)近隣、西ロンバード通り、アービュータス・プレイス、プレザンツ通りあたりにあった。ブルームは「アービュータス・プレイス、プレザンツ通り、楽しかったあのころ」(4.210)と回想している。

L. ハイマンによると、1881年、1891年、1901年の国勢調査では、アイルランド全体のユダヤ人の数はそれぞれ472人、1,779人、3,771人、ダブリンではそれぞれ283人、971人、2,048人であった。この数字に明らかなように、ユダヤ人はアイルランドに居住していただけでなく、1881年から1901年の20年間に約8倍に急増して、社会問題を引き起こしていたのである。

ユダヤ人のこの急増は、19世紀末のヨーロッパでの「反ユダヤ主義」の台頭を背景としている。ユダヤ人の迫害の歴史は連綿とつづいていたが、反ユダヤ主義というのは、ユダヤ人であること自体が犯罪だとするもので、ナショナリズムと人種論が一体となって生みだされたものである。かくして、ドイツでは、ビスマルクの宰相時代から反ユダヤ主義が広まり、ユダヤ人は諸悪の根源とされた。そしてこうした風潮はオーストリア＝ハンガリー帝国にも伝播し、パンフレットなどが大量に発行され、若き日のヒトラーに影響を与えている。またフランスにおいても、1884年のドレフュス事件で反ユダヤ主義はその頂点に達する。しかし、大量のユダヤ人移民を送り出したのは、何よりもロシアである。1881年にアレクサンドル二世が暗殺され、その罪がユダヤ人に帰せられ、ポグロム(虐殺)が発生したのである。

ユダヤ人の大方の新天地はアメリカやオーストラリアであったようであるが、なかにはイギリスやアイルランドに移住した者もいた。これはイギリスやアイルランドがユダヤ人に寛容であったというのではなく、大陸ほど反ユダヤ主義が苛烈ではなかったというか、苛烈ではないと期待されたためである。イギリスでも、「自分の国がドイツ系ユダヤ人に支配されるのを見たかない」(1.666)とヘインズの語っているように、経済を念頭に置いた偏見があったし、アイルランドにおいても事情は同じであった。

事実、1904年1月、J. クレイ神父がリムリックで説教壇から、ユダヤ人排斥を説いている。これは「ポグロム」にも等しい行為である。そしてその大多数のユダヤ人の居住するダブリンにおいては、客を奪われてしまうと危機を感じた商店経営者が、ユダヤ人排斥のポスターを貼り、さらには『フリーマンズ・ジャーナル』や『イヴニング・テレグラフ』といった新聞に、悪意に満ちた手紙を投書していたのである。ディージー校長の逆説は、プロテスタント教徒としての立場から、カトリック教徒のそうした状況を揶揄したものである。

『ダブリンの市民』所収の「小さな雲」ではユダヤ人女は金持ち・好色といったイメージを付与され、「恩寵」ではユダヤ人と金貸しを同一視している。また『若い芸術家の肖像』では、ユダヤ人居住区について、異国的情緒や貧しさの表象としている。そして『ユリシーズ』では、R. J. ドッドが髭をはやし、曲がった腰、高利貸し(6.252)という、まさしくユダヤ人を有徴化する記号で描かれている。こうしたユダヤ人に対するイメージは、ヨーロッパに古くから存在していたもので、アイルランド人特有のものではない。むしろ、ヨーロッパ人一般のユダヤ人観の反映である。それは彼らを蠱惑すると同時に、忌むべき「他者」である。

しかし、アイルランドの反ユダヤ主義が根拠のないものであったことは明らかである。ユダヤ人の「金貸し」(10.890)にしても、その実際は正確ではない。逆にユダヤ人の指導者が仲間に金貸しの職業を忌避するように要望していたほどである。興味深いことに、リムリックの排斥運動後の1904年5月、週刊誌『リーダー』は、「ユダヤ人は多くのカトリックと異なり、勤勉で真面目だから危険なのだ……アイルランドのカトリックはユダヤ人にあてこすりのお世辞を述べ、彼らを模倣すべきである」という趣旨の記事を掲載した。J. クレイ神父の反ユダヤ主義は、むしろアイルランドのカトリックの抱える不安を顕在化するものである。

もちろん、ブルームはユダヤ人ではない。当時の一般論からすれば、ユダヤ人とは「ユダヤ人の母親から生まれた人、またはユダヤ教に改宗した人」である。この定義によるかぎり、ブルームはユダヤ人ではない。彼の母親はユダヤ人とは言い難いし、彼自身はプロテスタントの子供として生まれ、モリーとの結婚のためにカトリックに改宗している。彼は割礼さえ受けていない。それでもブルームがユダヤ人であるとしたら、それは、彼がユダヤ人であると自ら考え、人々が彼をユダヤ人と思っているからである。そうであるならば、ダブリンの反ユダヤ主義は、人々にそのような思考を迫る、文化装置そのものを顕在化していることになる。

フリーメイソンとしてのブルーム

さらに、アイルランドのカトリックは、フリーメイソンも同じく猜疑の念で見ている。フリーメイソンは無心論と同じに捉えられていたのである。とりわけ1892年5月17日の女の孤児学校援助のためのフリーメイソン百年祭展示・バザーの開催をめぐり、カトリック側が参加者を破門にすると脅迫している。そうした事情を背景に、「アラビー」では、主人公の少年がバザーに出かけようと許しを求めると、叔母は驚き、「それはフリーメイソンみたいなものじゃないだろうね」と問う。

フリーメイソンは相互互助をこととする世界組織である。ダブリンにはモールズワース通り17-8番地にホールがある。ブルームがフリーメイソンであったらしいことはいくつか手がかりがある。まず、ノージー・フリンがブルームのことを「フリーメイソンの会員なんだ」(8.1151)とデイヴィ・バーンに耳打ちし、「市民」と称される人物は、ブルームのことを「あの糞つたれのフリーメイソン」(12.300)と呼び、モリーはブルームが彼女を教会に売り込もうとしたとき「イエズス会士たちが彼のことをフリーメイソンであると気づいた」(18.382)と独白している。また意識の隠れた部分が描かれていると言われる第十五挿話でも、「ボタン穴に青いフリーメイソンのバッジ」(15.812)を着け、「棟梁の長の合図」(15.2724)をして見せているといった、彼がフリーメイソンであることを暗示する記述が数多くある。

しかし、ブルームは今ではフリーメイソンの組織から離れているらしい。1893年、「国王特許ハンガリー富籤」(12.777)の販売で逮捕されそうになったときのこと、「支部の集会」(8.184)で司法に強いフォーキナー市裁判所判事の助力を得て救助されたようだ。この出来事で組織との関係が気まづくなったのかもしれない。それとも、結婚のためにカトリックに改宗したとき、教会がフリーメイソンとの関係を以後は断つことを条件にしたのだろう。いずれにせよ、ブルームがいまだフリーメイソンの会員である

ことは間違いない。

エドワード七世ら英国の王室の多くが会員であったように、フリーメイソンはプロテスタントと繋がりがあり、アイルランドで出世するには、総督公邸やフリーメイソンの組織とつながりを持つことが早道と考えられていた。フリーメイソンへのカトリック側の猜疑心はこうした差別意識を背景にしていた。ブルームが「フリーメイソン」と名称され当て擦られるとき、その言葉には「反カトリック」が含意されている。ちなみに、フリーメイソンとともに神智学もカトリック教会から難色を示されていたが、この問題は文学との関連でいずれ考察したい。

参考文献

- Barry, James. *Glasnevin Cemetery*. Dublin: Catholic Truth Society of Ireland, 1932.
- Benstock, Bernard. "Leopold Bloom and the Mason Connection." *James Joyce Quarterly*, vol. 15, no. 3, 1978.
- Clear, Caitriona. *Nuns in Nineteenth-Century Ireland*. Dublin: Gill and Macmillan, 1987.
- Connell, K. H. *Irish Peasant Society*. Oxford: Clarendon Press, 1968.
- Connery, Donald S. *The Irish*. London: Eyre & Spottiswoode, 1968.
- Connor, Patrick. "Bloom, the Masons, and the Benstock Connection." *James Joyce Quarterly*, vol. 17, no. 2 (1980).
- Fennell, Desmond, ed. *The Changing Face of Catholic Ireland*. New York: Corpus, 1968.
- Garvin, Tom. "Priests and Patriots: Irish Separatism and Fear of the Modern, 1890-1914." *Irish Historical Studies*, XXV, no. 97, 1986.
- Gill's Guide to Catholic Dublin: City and Diocese*. Dublin: Gill and Son, 1932.
- Herr, Cheryl. *Joyce's Anatomy of Culture*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1986.
- Hyman, Louis. *The Jews of Ireland: From Earliest Times to the Year 1910*. Shannon: Irish University Press, 1972.
- Keenan, Desmond. *The Catholic Church in Nineteenth-Century: A Sociological Study*. Dublin: Gill and Macmillan, 1983.
- Kennedy, Liam. *Colonialism, Religion and Nationalism in Ireland*. Belfast: The Institute of Irish Studies, 1996.
- Keogh, Dermot. *Jews in Twentieth-Century Ireland*. Cork: Cork University Press, 1998.
- Larkin, Emmet. "Economic Growth, Capital Investment, and the Roman Catholic Church in Nineteenth-Century Ireland." *The American Historical Review*, LXXII, 3, 1967.
- Lowe=Evans, Mary. *Crime against Fecundity: Joyce and Population Control*. New York: Syracuse University Press, 1989.
- Luddy, Maria and Cliona Murphy. *Women Surviving*. Dublin: Poolbeg Press, 1989.
- McCarthy, Michael J. F. *Priests and People in Ireland*. Dublin: Hodges & Figgis, 1902.
- Murphy, James M. *Catholic Fictions and Social Reality in Ireland, 1873-1922*. Connecticut: Greenwood Press, 1997.
- Paul=Dubois, L. *Contemporary Ireland*. New York: Baker and Taylor, 1908.
- Shanahan, Dennis M. "The Way of the Cross in Ulysses." *James Joyce Quarterly*, vol. 20, no. 2, 1983.